子供を守る新しい予防接種(Hib・肺炎球菌ワクチン)

細菌性髄膜炎(さいきんせいずいまくえん)は、b 型インフルエンザ菌(=Hib 菌。インフルエンザウイルスとは無関係)、肺炎球菌、髄膜炎菌などの細菌によって引き起こされる子供に多い感染症です。初期症状が発熱、嘔吐、痙攣(けいれん)など風邪に似ているために診断が難しく、また進行が早いため、治療が遅れると、死亡したり(5%)、てんかん、難聴、発育障害などの後遺症が残る場合(20%)があります。

2008 年の感染症発生動向調査※によると、全国で病原体の届出があった患者のうち、原因菌の数としては Hib 菌が最も多く、次いで肺炎球菌となっています。

県内の細菌性髄膜炎の発生動向をみると、2007 年から患者数が増加し始め、2009 年も増加傾向が続いており、全国と比べても多いといえます(図 1)。年齢階級別割合では、0 ～4 歳までの子供が全体の 74.8%を占めています(図 2)。

子供の感染を予防するには、予防接種が有効です。米国では Hib ワクチン、肺炎球菌ワクチンが定期接種として既に導入され、子供における細菌性髄膜炎の発生件数が大きく減少したとされています。日本でも Hib ワクチン(2008 年 12 月)、肺炎球菌ワクチン(2009 年 10 月)が認可され、生後 2 ヶ月以降の子供に対して予防接種(任意接種・有料)可能となり、細菌性髄膜炎が予防ができるようになりました。お子さんに Hib ワクチン、肺炎球菌ワクチンの予防接種を希望される方は、かかりつけの医師にご相談の上、接種するとよいでしょう。

予防接種の年齢スケジュールは次のとおりです。
http://idsc.nih.go.jp/vaccine/dschedule/Imm09-00JP.gif

※感染症発生動向調査・・・感染症法に規定された疾患の患者がどのくらい報告されたかを調査集計したものです。　【企画管理班】

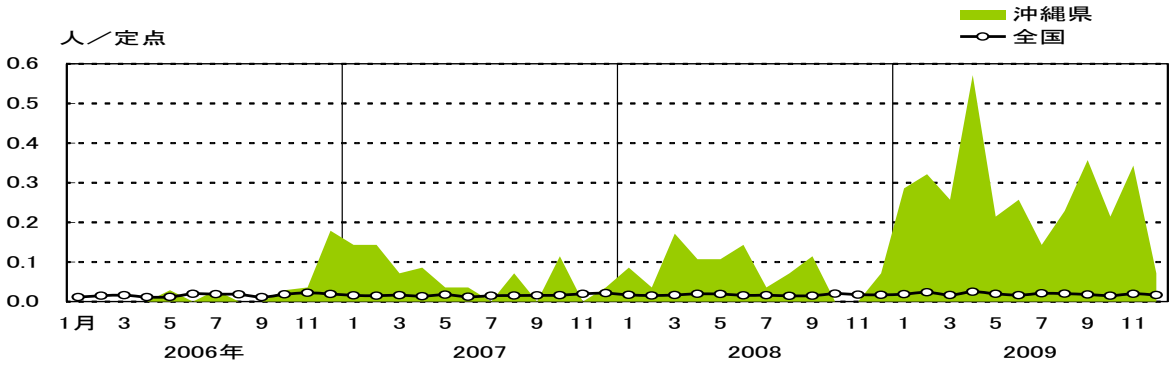

図 1. 細菌性髄膜炎の患者報告数（2006～2009 年 12 月末現在）

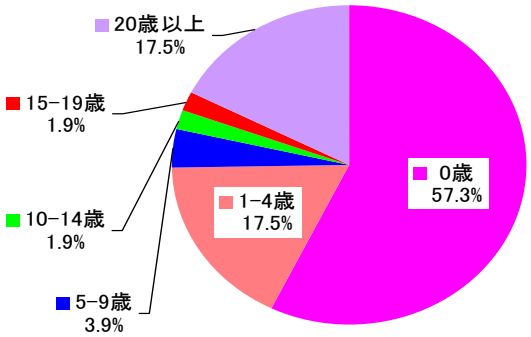

図 2. 細菌性髄膜炎の年齢階級別割合（沖縄県：2009 年 12 月末現在）